

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530516

研究課題名（和文） 美術館経験のヴィジュアル・スタディ：社会的空間の視覚的編制をめぐって

研究課題名（英文） Visual study of museum experiences: On visual organization of social space

研究代表者

安川 一（YASUKAWA HAJIME）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：00200501

研究成果の概要（和文）：

これは個別主観的经验を焦点に据えた来館者研究モデルの提示を主題とする社会学的ヴィジュアル・スタディである。来館者が自由撮影した写真をもとに対面インタビューが行われ、得られた画像と語り画像データベースに集積されて、美術館経験の集散的-離散的表象が試みられた。成果は一部館内で即時公開され、調査実践自体を経験増幅装置とするアクション・リサーチ的展開可能性も示された。ヴィジュアル・ナラティブの分析手法開発が課題として残った。

研究成果の概要（英文）：

This is a sociological visual study, whose theme is to propose a model of museum visitor study focusing on visitors' discrete experiences. Visitors photographed an exhibition respectively and were interviewed on their images. Images and narratives were accumulated into an image database, through which it was attempted to represent museum experiences collectively and discretely. A part of outcome was displayed immediately in museum, which showed a possibility of "action-research-like" development: making the research project an amplifier of museum experiences. One of unresolved task is the working-out of interpretation method of visual narratives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：視覚社会学、理論社会学、社会心理学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：視覚社会学、ヴィジュアル・スタディ、美術館来館者、画像データベース
写真誘出インタビュー、フォト・ヴォイス、ヴィジュアル・ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

これは“生活世界の社会学的ヴィジュアル

ル・スタディ”の一環としてデザインされた、美術館をフィールドとする経験的研究である。生活世界の社会学的ヴィジュアル・スタ

ディとは、“視覚的なものの主題化”を旨とする方法論・研究手法を採用した、日常生活世界の社会学的記述の営みである。そのひとつとして本研究は、美術館という限定的な、また視覚的経験が優位な社会的空間をフィールドに、人々の経験（美術館経験）の編制の実際を画像とことば（ヴィジュアル・ナラティブ）で提示することを試みる。

人々の生活世界を、視覚的なものを顕現させてデータ化、分析・考察しようとする研究は、都市社会学、都市工学や空間デザイン、人文地理学、人類学、認知地図研究、等々、量は多くないものの、様々な分野で多様な形で試みられてきた。そうした中、1970年代以降蓄積されてきた視覚社会学、視覚（映像）人類学の知見は、視覚メディア機材の一般普及とあいまって、視覚イメージ・ベースの研究の推進・増大・洗練を支えてきた。それらは、一方で私たちの社会的世界の視覚的編制の認識・探求を社会（科）学的研究課題として提起し、他方で“数とことば”に偏向する社会（科）学の現実認識と論理形成に再考を促してきた。いや、私たちは視覚的なものにあまねく優位な世界とその社会・文化的多様を生きているにもかかわらず、そのことを直視する思考の蓄積の圧倒的不在が問題視されたのだった。見る／見える世界のありようを、視覚的なもののまさにその実際を手掛かりにして社会（科）学する、そのことの重要性と必要性が強く認識されるようになった。

本研究は、こうした問題提起を引き受けて、G.ジンメルや E.ゴフマンに連なるミクロ社会学的パースペクティブにおいて構想された。その際に示唆されるところの多かった直截の先行研究には、子供たちによる写真撮影とディスカッションを手掛かりにして学校・教育評価を試みる教育学の実践的研究、写真撮影とインタビューを材料とした居住空間／生活様式とアイデンティティ形成をめぐる研究、同様の手法を用いての労働文化、移民社会、都市生活者、老人や子供の世界、等々を題材とした研究群がある（C. Knowles & P. Sweetman (eds.), *Picturing the Social Landscape*, 2004; C. Pole (ed.), *Seeing Is Believing?* 2005; J. R. Hall et al.(eds.), *Visual Worlds*, 2006; G. Stanczak(ed.), *Visual Research Methods*, 2007,等)。

また、研究代表者は、本研究に先だって、自叙的写真法(*autophotography*)による社会心理学的自己概念研究から着想した自叙的イメージ／生活世界研究を行なってきた（安川「視覚経験を社会学するために」『社会学評論』60(1), 2009; cf. 向山泰代『自叙写真法による自己認知の測定に関する研究』2010; R. C. Ziller, *Photographing the Self*, 1990)。これは、調査参加者たちの私的／公的な生活世界の実際を、参加者自身による写真撮影と写真説明記述、そして写真誘出的インタビュ

ーを材料に分析・考察しようとする研究である。それはまた、ヴィジュアル・メソッドの技法開発（とりわけ、研究管理推進型画像データベースの設計と写真誘出インタビューの手法整備）を主眼とする方法論的予備研究でもあった。

さらに、上述の先行研究群と同時期には、フォト・ヴォイス (*photo-voice*) と呼ばれる手法が、コミュニティ、生活環境、保健衛生観念、マイノリティ、ホームレス、各種シェルター、暴力、等々、様々な題材の研究に採用されるようになった。フォト・ヴォイスとは、調査対象者自身を研究プロジェクトの実践に組み込み、対象者の視点に立つ探索的映像作成とグループ・ワークを通じた言説生成をおこない、その成果を調査対象／現場にフィードバックし社会的に共有することを旨とする、調査対象者参加型・実践志向型のヴィジュアル・メソッドである。

本研究は、これらの先行研究、関連研究から学び、日本国内ではほとんど行われていないヴィジュアル・スタディを指向した課題設定と方法論とに基づく探索的で問題提起的な研究実践を目指すものである。すなわち、美術館をフィールドとする本研究の主題は、社会的空間における経験の多様性—同一空間に共存する人々の経験の相違／相同—のヴィジュアル・スタディである。人々は同一の社会的空間を、実質的な相違の中でしかし実効的に相同なそれとして生活している。その実際を、美術館の限定的空間の視覚的編制を事例として、経験的に記述しようとするものである。

2. 研究の目的

研究期間内における本研究の具体的な作業課題は、第1に、来館者の個別主観的経験を焦点に据えた視覚社会学的な来館者研究モデルとそれに基づく研究の展開可能性の提示、第2に、社会学的ヴィジュアル・メソッドの開発と定式化、そして第3に、ヴィジュアル・メソッドによる生活世界研究の、社会学的研究としての現実的実効性と展望の開示である。人びとの美術館経験を、画像と言説を手掛かりに厚く記述して、その集積・構成を通して“来館者視角中心的に”社会的空間を再現／表象すること、それが本研究の主題である。

(1) 美術館・博物館の建設・設置が進む中、あるいは公的なそれらの運営をめぐる様々な議論（指定管理者制度、等）がある中、来館者研究の実質化の必要が言われて久しい。教育・啓蒙の姿勢、もしくはミュージアム評価という観点から、展示の“効果”の測定を目指すそれらは、しかし、来館者の行動調査にせよ、質問票を用いた意識調査にせよ、来

館者の視線に即した知見を十分に蓄積してはこなかった。いわばマス・メディアの「利用と満足」研究に対応する研究の開発と蓄積が不十分である。行動観察研究は、一部で行われている相互行為論的研究も含めて、来館者の意味世界的経験の把握に充分でないし、質問票による調査研究では言語理解／表現能力に頼るその手法が“不慣れな来館者”や子供たちの経験把握の足枷となっている。こうした状況の中、来館者の視覚的／主観的経験に連なる画像データを起点に来館者自身の視線に即した経験記述を目指す本研究は、既存研究に対する補完的・批判的立場に立ちつつ、来館者研究の新たなモデルとなる可能性を秘めており、実際にそうしたモデルを提示することを課題にしている。

(2) 本研究が開発・定式化を目指すヴィジュアル・メソッドとは、具体的には「画像データベース」ベースの研究法とヴィジュアル・ナラティブ分析の手法である。「研究管理推進型の画像データベース」をもとに進められる。すなわち、調査参加者たちが撮影した写真画像を基本データとするデータベースを作成した後、写真誘出的インタビューの進行管理、インタビューから得られる言説データの集約・分析のプロセスから、分析成果の表示、プレゼンテーションに至るまで、調査研究過程のすべてがこのデータベースをもとにして進行する。基本設計は過去の予備調査で終えていて、本研究では、利用可能性を高めるインタフェース開発と、研究各段階の連続性強化とを焦点にした改良を行う。

また、分析と結果提示の手法として、ヴィジュアル・ナラティブの分析手法開発を目指す。本研究でヴィジュアル・ナラティブとは映像と言説が相互関連的・不可分的に人びとの経験を表象するあり方を指し、研究を通じて構築される画像データベースがその具体的な姿である。画像についてはフレーム分析(Goffman)、言説については「解釈レパートリー」(Potter & Wetherell)の考え方を援用しつつ、また、グラウンディッド・セオリー・アプローチの考え方に依りつつ、分析・考察を進めその成果を視覚的提示としうるための手法の開発を目指す。

さらに、上述したフォト・ヴォイスの考え方を採用して、本研究はヴィジュアル・メソッドによる来館者調査を、「美術館経験増幅装置としての調査」として性格づける。本研究は研究手法の効果測定や評価のための研究ではないし、来館者の美術館経験を単に現状記述するだけのそれでもない。予備調査において、本研究の手法は、来館者の美術館経験を活性化し、ある種の経験開発的側面をもつことが明らかになっている。参加者は撮影行為と対話を通じて自分の視覚世界とことばに向き合い、調査への参加なしには得られなかったであろう経験を獲得する。本研究はこ

のことを自覚しつつ、ある種のアクション・リサーチとして設計される。それは一方で、調査研究という営みの成果のもっとも直接的な社会的フィードバックの試みであり、他方またこの過程の精査は、見ることと語ることをめぐる視覚社会学的問いに対する回答へとつながっている。

(3) ヴィジュアル・メソッドによる社会学的生活世界研究の実効性と展望は、本研究の実践と成果フィードバックが計画通りなされるなら、おのずと果たされるものと考えられる。

3. 研究の方法

本研究の作業の基軸は、美術館来館者の美術館経験を画像と言説(来館者による写真撮影とこれに続く写真誘出インタビュー)によってデータ化し、美術館経験を“来館者視角中心的”かつ集合-離散的に表象すること、そして、こうした一連の作業プロセスを「画像データベース」によって管理・遂行し、またこれを分析・考察と成果フィードバックにも活用することである。

(1) 調査フィールドは、福岡市・福岡アジア美術館において平成21年9～11月に開催された美術イベント(福岡アジア美術トリエンナーレ)である。期間中に計3回(各3日間)の調査を行い、各調査では、(a)デジタル・カメラを使った一般来館者による館内撮影、(b)撮影された写真画像の即時データベース化、(c)データベース画面を手掛かりにした対面インタビュー(写真誘出インタビュー)、という一連の作業が繰り返され、それぞれの終了後には調査参加者に対して調査についてデブリーフィングが行われた。

調査のフィールドと期間の選択・決定は、これ以前の予備調査の経験・実績の蓄積、そして通常展示でないイベントにおいてはヴィジュアル・メソッドが即ち効果を生み出すだろうとの判断の上でなされた。福岡アジア美術館における過去3年半、7回の短期・単発の予備調査で調査手法を開発・整備するとともに、美術館から一定の評価と協力態勢を得るに至っている。

本研究がヴィジュアル・スタディを自任するのは、研究対象の中心に視覚経験が位置し、また、視覚経験関連的な素材と道具を全研究過程で活用するからである。来館者による写真撮影を起点とした調査は、館内経験の場面場面での痕跡を記録し、それを手掛かりにした事後の想起／言説を活性化させる。調査では、質問票ベースの来館者調査にしばしば伴う言語的制約が緩和され(10歳未満の子供から70歳を超える高齢者まで広範な年齢層が参加した)、美術館経験が来館者それぞれの気付きと想起から“来館者視角中心的に”意味付けられることが目指される。写真撮影しな

がらの館内経験が通常と異なるものになるのは確かだが、同時に参加への心理的壁も負担も通常調査よりは低く、また被験者にとっての新たな発見と楽しみの可能性も大きい。こうした手法が美術イベントというフィールドで一層効果をあげられると思われるのは、本研究のいわば“あるやり方の経験を仕掛ける”手法が、いつもにまして不自然でなくなり、参加への心理的壁もさらに低くなると期待できるからだ。来館者が通常よりも増えて多様になるうえ、館内の写真撮影がほぼ全面的に許可されることになって、サンプルの多様化と充実という点でも好ましい条件が整う。

(2) ヴィジュアル・メソッド定式化への手掛かりとして、「マッピング」という発想を試みた。つまり、画像と言説を並べ合わせ、類似／相違によって配置を替え、相互のかかわりを考え、全体の様子を見る。

分析・検討の焦点は端的に、来館者たちがどう見ていたか、を表象することである。そのため、第1に、得られた画像の二次元的・平面的マッピングが試みられる。画像は、参加者たちが館内のそこかしこで展示や設備や掲示や物品と自分自身、あるいは居合わせた他の人たちと自分自身とをどう配置したかを示す痕跡であり、表象である。被写体、距離、画角、枠取り、等々に着目した、また、対面インタビューをふまえての、画像の分類とマッピングは、来館者たちの館内経験の、“来館者視角中心の”意味世界のあり方の個別的-集合的な表象になる。

第2に、マッピングされた画像群は、インタビューの言説分析の成果を加味されて再編された。予備調査の写真誘発的インタビューでは、展示の外観・外形に言及する言説、作品の“内容”とそれへの思いを語る言説、館内で何が起きたかに触れる言説、等々の話りのパターン(=解釈レパートリー)が確認されている。各インタビューでの個別で雑多な語りは、しかし話りの集合的レパートリーの作動ならびにそれとの位置関係を含むものとして捉えられるのである。そうしたあり方を描ききすることは、これらもまた館内の様々な事物と参加者との配置を示す美術館経験の表象である。

第3に、そのようにしてマッピングされた調査結果は、その暫定的な一部が、各調査期間の直後に美術イベント内で公開された。来館者が撮影した画像はそれが誘出したことばとともに(フォト・ヴォイス)、かつ集合的に展示された。本研究が目指すのは、美術館経験の調査研究それ自体を媒介とした美術館経験の活性化である(「美術館経験増幅装置としての調査」)。具体的には、写真撮影と撮影後の語りを通じた、調査参加者の気付きの増幅、そして他の来館者たちの経験表象に触発された美術館経験の重層化である。

4. 研究成果

本研究の最重要な作業課題、すなわち「来館者の個別主観的経験を焦点に据えた視覚社会的な来館者研究モデルとそれに基づく研究の展開可能性の提示」についてはおおよその達成ができた。その一方で他については実現が部分的であり、今後の課題としたい。(1)「画像データベース」ベースのヴィジュアル・スタディ手法をほぼ確立した。本研究の遂行過程でデータベースが絡む焦点は3つ、すなわち、a) 画像データ入力とインタビュー、b) 画像/音声/テキストのデータ集約、c) 全体/個別の経験表象提示、であり、それぞれについて市販アプリケーション(FileMaker)を用いたアプレットの開発もしくは試作を終えた。来館者が写真撮影を済ませてインタビューに臨む際、撮影済み画像を一覧表示・選択表示・各種出力が可能な形で集約したうえでインタビューを始めるが、この過程はアプレットを用いて管理された。アプレットの操作サイクルがインタビューの進行サイクルになった。また、「個別主観的経験を焦点にする」と謳う本研究は、しかしインタビュアーが来館者の“内面に触れ、引き出す”ことを旨とはしていない。おおよその進行手順と研究上・倫理上の注意点を知らされただけの未熟練のインタビュアーたちは、話の聞き手というよりむしろ「おしゃべりの相手」として、集合的な言説のレパー

図1 画像データベース(一部)



来館者は、撮影した全写真を示されてそのうち6点の選択を求められ、この6点ひとつひとつを手掛かりにして美術館経験を語るよう促される。

トリーのいくつかが写真を見ながらの会話に具現することを支援する役回りを期待される。そして、聞き手としての力量も経験も雑多なインタビュアーたちは、アプレットを用いることで、この役回りをおおよそ果たす事ができた。ヴィジュアル素材を介在させることが何ゆえインタビューを円滑にすることができるのかは、そこから得られる言説の素性と性格を明確にするためにも今後の検討を要する焦点だが、ともあれ事実として、画像は発話を協働的に引き出し、またデータベースはインタビュー過程の管理に寄与したのだった。

(2) ただし上記 b と c のデータベースは試作品に留まっている。b の、全インタビュー遂行データベースを統合するデータベースは、膨大な音声データのテキスト化作業が完了しておらず、それゆえ未完である。c が未完であることは、「美術館経験を“来館者視角中心的”かつ集合-離散的に表象する」という本研究のもうひとつの目標からすれば致命的だが、b の現状ゆえにやむを得ず、ただし、本研究に先立って実施していた予備調査のデータを用いてのプロトタイプは作成済みである。この試作版をふまえても、画像データベース(=ヴィジュアル・ナラティヴの閲覧/検索可能な集積態)を美術館経験の集合-離散的表象として編み上げることの有効性は充分に見込めるだろう。一方でそれは、来館者の多彩な経験を集成し、個別なまたインタラクティヴな再現(=追体験)を実現するとともに、他方、見方/見え方と語りの語彙(=集合的レパートリー)の抽出を可能にする。画像データベースのヴィジュアル・ナラティヴは、多様にあらわれる個別の経験が、しかし集合的表象の具象化事例でもある、という事態を操作的に把握する装置となりうるだろう。

(3) 本研究は、フォト・ヴォイスの考え方を援用して一部にアクション・リサーチ的展開を含むよう設計されていたが、計画を実地に移した結果、そうしたものとしての本格設計がおおいに有望であるとの感触をえた。まず、“館内撮影～インタビュー”という一連

の過程は、来館者それぞれの美術館経験を活性化し、いっそう多様化、増幅するものとなったようだ。本研究への参加自体、来館者にとってたぶんに美術イベントの一部だったろうし、そうでなくても、撮影～インタビューの過程はそれぞれの美術館経験を異化、対象化し、さまざまな気づきをもたらしたようだ。そして、そうやって得られたヴィジュアル・ナラティヴは、3回の調査期間のそれぞれ直後から会場内に展示(プリントならびにスライドショーによる)され、他の来館者の目にふれるものにした。展示に関わる来館者それぞれの個別経験を展示の一部に含み込ませていくという美術館経験重層化の試みは、それが来館者たちにどういった効果をもたらしたかと検証課題を残しつつも、美術館経験を豊かにすることに、そしてアクション・リサーチがその一翼を担うことに(「美術館経験増幅装置としての調査」)、有望であると思われる。

(4) ただし、残された課題は小さくない。

第1に、ヴィジュアル・メソッドの定式化、とりわけ、ヴィジュアル・ナラティヴの分析-解釈手法の定式化が、未だ果たされていない。本研究が試みた「画像のマッピング」は、美術館経験群の文字通りの集合-離散的表象を実現したが、それ以上の解釈は難しかった。一方でマッピングの結果はその雑多な集合体のまま提示され、受容されるべきものだろうとも思う。アクション・リサーチ的展開においてはむしろこのままが効果的だろう。けれども、今後他のフィールドと比較調査研究を実施していくためには、さらに個々の来館者の経験に具現される美術(館)関連的な言説レパートリーのあり方を考察していくためには、集約的ベクトルを強めた議論が必要である。そのための方法論とその論理が示されなければならない。

第2に、調査研究のすべての位相でヴィジュアルであることを旨とした本研究だが、思いしらされたのは、来館者たちにおいて、ひいては現代の社会-文化において、「ヴィジュアルであること」の意味/意義を問い直す必要性だった。画像は協働的な語りを何ゆえ活性化できたのか。それはことによると変質化ではなかったか。そもそも来館者による館内写真撮影自体が経験を変質させていただろうが、それはどのようにだったか。そして、いずれの問いも何らかの意味での自己対象化、再帰化に何らかの点で触れることになるだろうが、それはいかなる自己対象化、再帰化だったか。つまりは、「ヴィジュアルな再帰化」とでも呼ばれようことが、本研究の遂行過程においていかなる様態で起こり、何ををもたらしたのか。理論的方法論的問いが山積みになった。

図2 スライド・ショー展示したフォト・ヴォイス(一部)



5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安川 一 (YASUKAWA HAJIME)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：00200501